

愛隣館研修センターニュース

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町 151 Tel:075-621-3849 Fax:075-621-1579

E-mail:airinday@sunny.ocn.ne.jp http://www.airinkan.net 振替:01020-5-39321

編集発行所:社会福祉法人イエス団 愛隣館研修センター 発行責任者:平田 義

117号

「多文化共生」の地域ってどんなかなあ～？

ひらた ただし
平田 義

「多文化共生」という言葉が巷で目にするようになってきました。向島まちづくりビジョンでも「誰もが活き活きと暮らせる向島～暮らし心地を誇れる『多文化・多世代共生のまち』を目指す」とあります。これを策定する際に大切に考えたことは、「多文化」とは単に国籍や民族の違いだけでなく、障がいの有無や世代間のギャップ、LGBTQ、性自認や性的指向の違いなども含めるといことでした。地域の中にはいろいろな人が暮らしています。その人がその人らしく生きていけるように人権と尊厳が守られる地域社会が作られていくことを目指していかねばなりません。今号では向島、東九条で多文化共生のまちづくりに取り組んでこられた方からご寄稿いただきました。ご一読くださり、真の意味での「多文化共生」のまちづくりを共に目指していきましょう。

住みやすい国、住みやすい「まち」、最大の条件とは

きょうと ぶんきょうだいがく そうごうしゃかいがく ぶきょうじゅ すぎ もと せい こ
京都文教大学総合社会学部教授 杉本 星子

住みやすい国、ってなんだろう。書評家の三宅香帆さんが京都新聞の「現代のことば」に寄せた文章（2023年12月7日）に目がとまりました。

三宅さんがベルギーのブリュッセルに友人を訪ね、二人でベルギー・ビールを片手に談笑していたときのこと。もし世界中のどこにでも住めるなら、どこに住みたい？という問いに、友人は、やっぱ、ベルギーがいいかなあ、と言いました。なぜなら、いろいろな人種の人がいるし、みんなそれをあたり前だと思っているから。アジア人の私でも、ぜんぜん差別なんか感じないんだよね、と。三宅さんは、それまで、住みやすい国とは、治安が良くて物価が安くて清潔で美味しい食べ物がある、そんな国だと思っていたけれど、しかしそれは本当だろうか、差別がない、ただその一点が、住みやすさにつながる最大の条件ではないか、と考え込んでしまいました。そして、それは民族の問題だけではなく、身体的にマイノリティーであること、さらにはことばや思想をバカにされないとか属性のみで何かを判断されないとか、そういう些細な部分の「差別されてなさ」こ

それが、その場所の住みやすさにつながるような気がする、と思っただけです。

このコラムを読んだとき、向島まちづくりビジョン推進会議をとおして、向島の住民や事業者、学生たちがめざしていたのは、まさにこの意味での、住みやすい街づくり、すなわち『居心地のよい「まち」づくりへの挑戦—京都南部からの発信』（杉本星子・三林真弓編、2023年3月、K-nit）であったと、改めて思いました。当時は、目の前の地域課題一つ一つに取り組むことに夢中になっていて、あまり強く意識してはいませんでした。それでもわたしたちは漠然と、だれも排除しない、だれも排除されない「まち」づくりへの思いを共有していたように思います。しかし、ビジョン推進会議が終わって2年。コロナ禍も収束し、向島ニュータウンにもその周辺地域にも、外国籍の住民がさらに増えてきている今、住みやすい「まち」づくりは、どれほど進んでいるのでしょうか。

少子高齢化が急速に進み、外国人労働者なしに国の経済が立ち行かないという危機感が煽られるなかで、多文化共

生という言葉をあちこちで耳にするようになりました。わたしは文化人類学者ですので、多文化共生問題の専門家だと思われています。実際、大学では「多文化共生論」の授業を担当しています。その最初の講義で学生たちに語るのは、多文化共生という言葉は危険だから注意せよ、ということです。なぜなら、多文化、といったとたんに、人と人を区別するうえで文化の違いが決定的な意味をもつかのような印象が与えられてしまうからです。それと同時に、一つの文化と一つの国あるいは一つの民族とが、あたかも一対一で対応するかのようイメージもつくりだされています。文化人類学では、文化とは、人が生まれ社会のなかで生きるなかで身につけた生活のあり方の総体をさす、と定義されています。文化は、一つ二つと数えられるようなものではないのです。確かに、特定の言語や宗教といった、なにか一つを基準にとれば、それを共有する人々のまとまりを捉えることができるかもしれません。でも、基準が変われば、まとまりも変わります。〇〇人とか、〇〇文化なんて、幻想にすぎないのです。幻想は人を魅惑します。でも、その幻想に身をゆだねてしまうのは、危険です。

多文化共生という言葉の危険性は、「共生」という言葉のなかにも潜んでいます。「共に生きる」という動詞形なら、ケンカしながらもなんとかやっていくこともありでしょう。でも、「共生」という名詞には、共に生きるために仲良くしなくてはいけない、理解しあわなくてはならないというニュアンスが含まれがちです。もちろん、分かり合おう

とすることや、友好的な関係は大切です。しかし、そんな共生を強制されては、息苦しくてかきません。共に生きるために最も大事なことは、ベルギーのように、いろいろな人がいて、みんながそれをあたり前だと思っていて、「差別されてなさ」が実感できること、なのです。

というわけで、わたしは、多文化共生という言葉が大嫌いです。多文化共生社会、なんていわずにストレートに、差別がない社会、といえよいのではないのでしょうか。多文化共生社会というと、行政が予算をつけて多文化共生事業を策定してなんとかしてくれそうな、あるいは日本語教室ががんばってね!といった、どこか他人任せの気持ちになります。でも、差別がない社会、という言葉は、私たちひとりひとりの心に問いかけてきます。差別の根っこは、人の心のなかにあるからです。たとえ分かり合えなくてもいい、ケンカしながらでもいい、差別がない、というその一点を確保した、だれもがそこに居てよいと安心できる「まち」は、わたしたちひとりひとりの心のありようから生まれます。そこから、わたしたちの生活のありようとしての、すみやすい「まち」の文化がつくりだせるでしょうか。遠い未来から、問われているように思います。

『居心地のよい「まち」づくりへの挑戦—京都南部からの発信』(杉本星子・三林真弓編、2023年3月、K-nit)、ぜひ、読んでください。お申し込みは、向島まちづくり情報発信グループ杉本 s-seiko@po.kbu.ac.jp まで。)

幅広い多文化共生社会をめざす交流

地域福祉センター希望の家 宇山 世理子



私が働く希望の家は京都市南区東九条の北東、鴨川近くに位置し、すぐ北隣には、今年10月1日に京都市立芸術大学が移転してきた崇仁地域(下京区)があります。

戦後、鴨川、高瀬川周辺は全国から住居や仕事を求めて東九条にたどりついた人たちが建てたバラックで埋め尽くされていました。また、1910年日韓併合以降、朝鮮半島から渡ってきた朝鮮人が多く暮らしていた地域でもありました。

希望の家がある地域は4ヶ町と呼ばれ、住居、貧困、教育、火事、地上げなど、長年多くの問題をかかえてきました。ここで60年以上、希望の家は住民さんたちとともに歩んできました。

の研修でこの町に来た頃は、地域で活動している先輩たちのおかげもあって、町中が知り合いのようでした。子どもに「何人(なにじん)?」と聞かれることが挨拶代わりだったり、韓国料理やホルモン、豚焼肉の店が昼間から労働現場帰りの人たちでにぎわっていたり、「はだかのおっちゃん」という名物おじさんがリヤカーを引いて町を歩いたり、私が住んでいた町とは明らかに違う空気が流れていました。希望の家の大バザーにはフィリピンやペルー、メキシコからの労働者が来られていました。そんな町の雰囲気は、とても居心地がよくて、今思うと、この町の歴史が生み出した多様性だったのかなと思います。

希望の家事業は、京都市の同和対策事業にかなり影響を受けていました。2002年同和対策が終了し、2008年京

私が1991年にHEAT(東九条キリスト者活動協議会)

都市同和行政終結後の行政の在り方総点検委員会の報告により、コミュニティセンター（旧隣保館）が最終的には、民間委託のいきいき市民活動センターへと移行していきます。その過程の中で、希望の家が京都市の委託で行っていた、隣接する生活館（隣保館に準ずる建物）のやすらぎ教室（高齢者対象の文化教室や会食、おでかけなど）や、一人暮らしの高齢者巡回訪問なども終了することになります。今の希望の家がある建物には、生活館と一緒に入る予定でしたが、京都市の急な方針転換により、そこで「京都市地域・多文化交流ネットワーク促進事業」を行うことになったのです。

この事業は「京都市地域・多文化交流ネットワークサロン（以下、ネットワークサロン）」という名称で13年目を迎えます。団体登録制度を用いて、団体とつながり、交流し、協力しあうことで「幅広い多文化共生社会」を目指す活動を行っています。子ども、高齢者、在日コリアン、フィリピン人、障害者、LGBTQ、依存症者や家族、アーティストなど、さまざまなコミュニティや施設、団体が、現在66団体登録しています。

4月に行っている東九条春まつりは、登録団体が作るまつりです。一番の目的は出会って交流すること。それだけのこともありませんが、この事業が始まる前は、同じ地域にある施設がどんな場所でどんな人が働いているかわかりませんでした。10周年に発行した通信では、この町がヘイト集団に攻撃された2010年、差別者を目の前に団結することができなかったことがセンター長によって書かれています。この経験から12年。今では東九条で活動している団体、施設が日常的につながり、東九条マダン、東九条空の下写真展、東九条芸術祭、京都福祉まつりなど、さまざまな取組みを一緒に行っています。

ネットワークサロンでは研修受入も行っています。「歴

史」「在日コリアン」「まちづくり」「多文化共生」など、求められるテーマはいろいろですが、登録団体が協力して研修を行うこともできるようになりました。

私が話す場合は、先にも述べたように東九条の人々の暮らしの中に多様性があり、多文化共生社会を目指すための基盤があったと思っていますので歴史には触れませんが、最近特に学生さんたちに交流の重要性を伝えるために、東九条やネットワークサロンでの出会いによって起きた私の心の変化をお話しています。

- ・私が育ってきた環境の中に朝鮮人はいなかった（と思っていた）。
- ・障害者は年に一度、教会で交流する人たちだった。
- ・薬物を使った人は犯罪者で悪い人だと思っていた。
- ・東九条でさまざまな背景をもつ人たちと出会って、仲良くなって、こう思うようになった。
- ・朝鮮人（親友）や障害者（仲間）が、なぜ排除されなければいけないのか。
- ・薬物依存症の人たち（いつも一緒に活動しているこの人たち）が、社会の中で人とつながりながら生きようとしてはだめなのか。

出会ったことによって、社会に対してやるせなさ、悲しさ、怒りを感じるようにもなりましたが、さまざまな背景をもつ友人、仲間と過ごしている今ではあたりまえの日々が、本当に幸せだと思っています。だから、ネットワークサロンの幅広い多文化共生社会を目指す取り組みは、私にとって大切な人たちとともに生きるための大切な取り組みなのです。

「あたりまえ」「普通」「常識」のラインは、いつでも自分で変えることができ、そのことで自分自身の人生が豊かになることを多くの人に経験してほしいです。



▲東九条春まつりフィナーレ「さむるのたまご」

東九条のフィールドワークに行ってきました

永江 孝志

11月26日(日)平和研修の一環として、在日韓国朝鮮人の方々がおくすまわられている東九条にてフィールドワークをおこないました。東九条にある希望の家で前川修さん(希望の家・館長)の講演を聞かせて頂く事ができました。

戦争の混乱のため異国の地・日本に連れて来られた韓国・朝鮮の人々が終戦後も帰国できず、被差別部落の周辺地域に移住された歴史について。地図や公文書など貴重な資料を紐解きながら、江戸時代から現代へ続く東九条の変遷について解説して頂きました。江戸や明治、大正時代に思いをよせて町の動きを考えたことがなかったのととても新鮮な学びとなりました。

高度経済成長期には新幹線の開通に伴う崇仁地区の立ち退きなどもあり、東九条の河原にはバラック住宅が所狭しと建ち並びました。以降も虐げられ続けた住民の方々と共に生きようと生活面・教育など様々な活動をおこなう「希望の家」が出来ました。その希望の家の建物も現在4代目となり隣保事業として活動してきましたが、それも制度が打ち切れ出来なくなりました。前川さんはこの頃を振り返って「制度によって自分たちの働き方も余儀なく変化を迫られ、明日の見えない日々でした」と語っておられました。

現在では東九条も整備が進み、住みやすい地域になっています。今、京都府が掲げている『芸術と融和する京都』という町づくりテーマに沿った企画がひとつ動いています。それによりチームラボの施設などが東九条の住宅地に建設予定されています。日本中から、いや世界中から観光客が集まり東九条は活性化するかも知れません。しかし前川さんは「東九条の活性化は大いに賛成だが、不特定多数の観光客が雪崩れ込む事によって地域住民が築き上げて来た暮らしが脅かされはしないだろうか」と一抹の不安があるそうです。長い街の歴史の中で変化や進歩が起こってきましたが、そこに住む人の思いや今回私たちが歩いて回った街の匂いなど、本当に大事にしたいといけないうことまでもが変わらないように、「街と、人と出会う」事の大切さを学んだ1日でした。

アフターミニングミニストーリー研究報告会 LGBTQ の話をしよう「虹は見えただかな？」

鳥井 新平(近江平安教会牧師)

おもしろい会に出た。研究ってむずかしいと思ってたけど、なんかワクワクするやん。アフターミニングって何のこっちゃって思ってたけど、「ありのままそのままでええんや!!」ってことがわかった。

1部は礼拝。黒多牧師が話をした。「歳とると耳が聞こえにくくなる」とか言って、ウサギの被りもんをしゃはった。大きな白い耳がピクピク動いていた。お話の途中で、携帯電話がなった。黒多牧師が出ると、なんとイエスさんからの電話やった。ミサイルが飛んで、爆弾がバンバン落とされているところから、こちらにやって来るという。黒多牧師は「みんなで虹が見れますように」と祈った。

2部は小グループに分かれての話し合い。「どんな色が好きですか?」「今朝は何かを食べましたか?」など、いろいろお話をした。おもしろい、変わった人がいっぱいいた。最後にグループの旗を作った。その後、みんなで、また集まって、グループの代表がアイマスクをつけて、手触りで自分のグループの旗を当てた。触るって楽しい。目で見ること無くしている感覚を総動員することができた。

3部は、ダモンテさんの作った超美味しい料理をいただきながら、おしゃべりをしたり、歌ったり、踊ったり。その日に結成された「虹色楽団」の演奏はファンキーやった? 愛隣館ヴェグウギ? それぞれの違いを楽しみながら、自分のありのままを出し合える楽しい研究会でした。



▲ダモンテさんのおいしいお料理

新愛隣館建設後の募金のお願い

～インクルーシブ社会の実現を!～



2021年4月より、新愛隣館に戻ってまいりました。建築費用は、自己資金と借入金のみで賅っております。つきましては、皆さまからのお支えを引き続きお願いしたいと思います。これまでも、多くのお支えをいただいておりますが、重ね重ねのお願いで恐縮ですが、何卒よろしくお願いたします。

<寄付金振込先> 寄付控除が受けられます

郵便振替: 01020-5-39321

口座名義: 社会福祉法人イエス団愛隣館研修センター

*募金目標額: 5百万円

編集後記

▼みなさまからのご意見ご感想お待ちしております(さ)

▼イスラエルによるパレスチナ人への大量虐殺が続いています。ウクライナでも殺し合いが続いています。何故止められないのか、私たちがどうすれば大切な命を守ることができるのか。その惨憺たる現実の前にやるせなさが募ります。沖縄の辺野古では殺し合いの訓練のための新基地建設を進める工事が県民の意志を無視し、強行されています。世界有数の巨大サンゴ群落が広がり、約260もの絶滅危惧種を含む5300種以上の生物を育む「宝の海」を埋め立てようとしているのです。命を奪い合う戦争のための基地建設により自然の「命」が減っていくのです。私たちは、命を守るため、平和をつくるため、決して諦めずに声をあげ続けていきたいと思います。(ひ)